

KCのダルバートはカトマンズNo. 1!! 我が家の使用人紹介 (その1)

美澄が出産準備で一時帰国して、我が家には3人の使用人と私が残った。これから数回に分けて、我が家の使用人を紹介しよう。その記念すべき第1回は、門番、掃除係、庭師、そして現在はコック兼任の、Mr. Sri Bahadur KCである。

着任した私が入居する前から、KCは夫人のシータと一緒に、大家から頼まれてこの家の留守番係として離れに住んでいた。大家は「あなたが入居した後も住まわせる必要は必ずしもない。」と言ったが、新たな使用人を探してくるのも面倒だったので、そのまま住ませた。彼はネパール語は文字も理解できるが、なにしろ英語ができない。最初の頃は当時のドライバーを通じて通訳してもらっていた。当初、KCは外で働いており、留守番と掃除係は専ら妻のシータがしていたが、この1年ほどシータが病気がちで、看病も兼ねて家事をこなしてくれたKCはいつの間にか外での仕事に行かなくなり、我が家の専任スタッフとなった。

彼は、庭の掃除はしてくれるし、畑の野菜の世話、鶏の世話もしっかりしてくれている。家の中では、私達の衣類の洗濯、食器の後片付け、部屋の掃除、営繕等、この家に関するあらゆる仕事をこなす。時には美澄の料理の手伝いをしてくれた。試したことはないが、彼は味噌汁を作ることまでは覚えたという。

美澄が帰国し、KCには新たな仕事ができる。私の夕食の準備である。ネパール料理の定番といったらダルバートだが、残念ながらカトマンズでは美味しいダルバートに出会ったことがなかった。去年11月に美澄が流産の危険があって寝込んだ時、KCがダルバートを差し入れてくれたが、この時食べたダルバートがとても美味しかった。香辛料が効いていて私のお好みの味だった。美澄が帰国する際、コックを新たに雇おうかという話が出たが、私はKCのダルバートで十分だと思った。毎晩出される食事はダル(豆)スープとタルカリ(野菜炒め)、それにオムレツ。ご飯は美澄から指導を受けて、電気炊飯器で日本米を炊いておいてくれる。パターンは同じだが、ダルの味は毎晩違い、その変化がとても楽しみである。KCはチェトリー族で、肉は食べないし、酒は飲まない。毎晩菜食の健康メニュー。私はこれに、ドライバーのクリシュナに買ってきてもらったロキシー(沖縄の泡盛に似ている)を2杯ほど飲み、1人の夜を過ごす。

仕事で出会うネパール人の公務員は、殆どと言っていいくらい働かない。事務所のスタッフでも、私はその要領の悪さにイライラすることがある。それに比べれば、KCは信じられないくらいによく働き、よく気がつく。敬虔なヒンドゥー教徒で、美澄も感心するくらいに人が良い。プライベートでは本当に良いネパール人に恵まれたと思う。

加えて、彼は、今私のネパール語の先生でもある。毎朝ジョギングから戻った後、仕事を終えて帰宅した後、私はすぐに家の中に入らず、暫くKC達と話をする。家のこと、そしてメンサーブ(女主人、美澄のこと)の近況等、つたないネパール語で話す。日中仕事で家を空ける私にとって、ハウススタッフとコミュニケーションを図る貴重な時間である。

カトマンズ生活白書 住めば都だよ、我が愛しのこの街

今まで美澄が家事を取り仕切ってくれていたもので、私があまり生活に関する話題を紹介することはなかったが、面白い(?)話題を幾つか紹介してみよう。

★乾季が終わり頃になると、街には給水車の姿をよく見かける。1トン1,000ルピーだそうである。これは1人当り国民所得が10,000ルピー程度のネパール人にとってはかなり高い。在留邦人の中にも早々と水が切れて、風呂の回数を減らす、食器を洗った水でトイレを流す等、涙ぐましい努力をしたところもある。住んだ家に当り外れが大きく、隣は水が沢山来るのに我が家は水が来ない等ということはざらにある。因みに我が家は、不法な水道管を1本引いており、今でも地下水槽の水が満タンで、時には庭が水浸しになる。料金は月々131ルピー! 請求書が来てすぐに払うと何ルピーか割引になる。

★ところで、給水車には"Pure Drinking Water"(飲料水)と書かれているが、これは嘘! 郊外の小川の水を取水しているだけで、何等殺菌処理等はされていない。ある在留邦人の家では、給水車が来た後のタンクに魚が浮いていたそうだ。

★カトマンズ盆地に電気を供給しているクリカニ水力発電所で、現在水底に溜まった土砂の除去作業が行われており、この影響でカトマンズでは、4月20日より地区と時間帯を決めた計画停電が実施されている。約1日おきに3時間の停電、ロウソクの消費量が格段に増えた。サネバ地区一帯が真っ暗になるので、ヘルポップ彗星が肉眼でよく見える。

★カトマンズでは間違い電話が多い。無言で切る奴はまだましで、頭に来るのが、自分の名を名乗らず「そどこ?」と言う奴。「〇〇さんのお宅ですか?」と言ってほしいところだが、この国の電話普及率は低く、大抵の場合近所の電話スタンド(自分ところの電話を使わせて料金を取る)からかけているので、聞き方が「そどこ?」となるのは仕方がない。ただ、「ここはサネバだよ。」とこちらが言い終わる前にガチャンと切られるのには憤慨する。これは日本でも同じだが。

★興味深いデータだが、ネパールでは、過去10年ほど遡ってみても、在留邦人が当地で仕込んだ子供は100%男の子だそうである。うちも男だし、唯一の期待の星だった園芸プロジェクトの大町さんの第2子も、先日の超音波測定で、ちゃんと付いているモノが付いていることが判明し、ご夫妻はショックを受けられたとか。食生活のせいだと言われているが、この確率は異常だ。中国人相手に「男児出産種付けツアー」なんて企画したら、良い外貨稼得源になるかも。でも、それだったら、なんでネパール人にはちゃんと女の子の出産もあるんだろうか。とっても不思議・・・

発展途上国の貧しい人々を見れば、何かしてあげたいと思わない人はいない。そんな人が私財をなげうってNGOを興してネパールにやって来る。それはとても有り難いことであると思う。昨年11月、中日新聞に三重県のあるNGOの記事が掲載された。飲料水にも困っているネパールの村人のために給水施設を作る、その予備調査に行くのだという。併せて市民から古着や学用品を募って「お土産」を沢山持って行くという。因みに、この給水施設の設置場所は、NGOの代表者の経営しているレストランのネパール人従業員の故郷だそうだ。私はこの手の話を聞くと、少し憂鬱になる。

古着を村人に配るのが本当にその村のためになるのか。衣食住のうち衣はその村の最も危急なニーズではないと思うのである。これは村人たちが自分たちの生活をもっとよくするには今何が必要なのかを自分たちで考えた結果でなくてはならない。我々部外者が勝手に決めて物で渡せば済む話ではない。住民が話し合っただけで給水施設を作ると決めたなら現地で調達できずに購入せねばならない資材があるだろう。そういうものを購入するための資金を供与する方がよほど村のためになると思う。

次に、サイト選定は日本の個人経営のNGOのとっかかりはその程度のものだと思うが、問題はその村に先に述べた自分たちの村を自分たちでよくしようとする土壌があるかどうかだ。給水施設をこちらが買い与えれば問題が解決されたというわけではない。維持管理が自分たちでできるのか。設置場所にしても住民たちの話し合いで決めないと、往々にして地元の名士の近くに作られて、本当にそれを必要とする人々が裨益しない危険もある。工事に住民も参加しないと、「自分たちの施設」という意識が欠如して、後々の維持管理が疎かにされやすい。住民にそうした組織活動の受け皿がないと、作られた施設が本当に村の生活向上に繋がるのかどうか疑問である。

最後に、この日本のNGOが事業のモニタリングに責任を持てるのか。誰も常駐させず、たまに来て物だけ与えて、住民の依存心と期待心だけを煽って帰って行く。住民の組織化に協力し、住民自らが維持管理を行うメカニズムを作り、そしてそのモニタリングと評価を責任もって行うことが大切だ。先述のNGOなどは、そもそも本件と無関係だった協力隊員に、面識もないのに配属先が村の近くだという理由だけで図々しくもモニタリングを依頼したと聞く。

個人経営のNGOは運転資金が潤沢でない、確固たる理念に基づいてシステムチックに活動ができない等問題点が多い。そこで、私は以下の2つの案を考えてみた。本人達の満足度は十分満たせないだろうが、最も住民のためになる方法だと思う。

★既にネパールで確固たる実績をあげているNGOに資金提供する。どこも低金利による日本の郵貯資金の先細りで活動資金が十分ではないため、草の根展開のノウハウはあるのに継続的活動に支障を来しているケースがあると思う。

★どうしてもこの村、この地域にという希望があるならば、その地域で活動を展開している現地NGOをパートナーに選び、これに活動を委託することもできる。仕事柄この手のNGOがJICAの支援を求めて事務所に来ることがあるが、こちらのNGOは、村を良くしたいという熱意はあるがカネがないところが多い。勿論、私は実際に彼等の活動を見ていないのでその活動が手放して支持できる保証もないし、JICA職員としてはこの手のマッチメーキングは斡旋できないが。

この国でお手盛りのNGO活動を行おうと思ったら、各郡のChief District Officeか、女性社会福祉省の社会福祉評議会に先ず登録をせねばならない。それすらも知らずに活動しようとしている日本人は多いのでは?今回書いたことは直接私の仕事とは関係ないが、さすがに三重県の某NGOの話には腹を据えかねたので、ここで紹介することにした。

探検、異国の映画館 ネパールの映画は長くて疲れた!!

'Channel V'という音楽番組の衛星放送チャンネルを見ていると、毎日定期的に'First Day First Show'というヒンディー映画の挿入歌の紹介番組が放送されている。お隣インドは知る人ぞ知る世界の映画大国であるが、挿入歌は全てダンスミュージック、しかもその大半がスイスのアルプスやレマン湖をバック男優と女優がペアで踊って歌う(歌い手は別にいて俳優は口パクをやっているらしい)というお決まりのパターンなのだが、娯楽の少ない南アジアの民衆には大受けなのである。しかし、本ちゃんの映画は見たことがなかったので、一度試しに見てみることにした。

KCにチケット販売は11時からと聞き、映画館に行ったら既にチケット売場は長蛇の列だった。特別席は15ルピーだったが、窓口販売は10分足らずで完売で、買い損ねた私はダフ屋から30ルピーで購入した。中は日本の映画館と同じ。案内係に特別席はどこかと聞いたら、1階の最後列に案内された。これ本当に「特別」なのと怪訝に思った。みるみる会場は観客で埋まり、11時30分開演。'AWTAAR'(輪廻転生)というネパール映画だった。ネパール映画だと気付いたのは、上映開始後。普段テレビで見慣れている画像に比べて画質が格段に悪く、登場するタクシーから判断して過去1年以内に制作された筈なのに、20年以上前の作品のようだ。ストーリーは完全な勧善懲悪もの、途中何の脈絡もなく突然俳優のダンスミュージックが何度も挿入される。挿入歌はこういう風に使われているのだというのがよくわかる。上映開始1時間30分後、10分間の休憩に入る。休憩の合図は、ジュースの売り子が栓抜きでピンをチンチン叩くのである。映像が切れていないのに観客が席を立ち始める。後半さらに1時間以上かかった。娯楽の少ない国の映画は長いのだ。面白かったのは、映像が途切れたり、停電になったりした時の観客のブーイングと、格闘シーンで主演男優が悪党どもを叩きのめした時の観客の拍手喝采だ。日本の観客は静かに映画鑑賞としゃれ込むが、ネパール人にとって映画は娯楽、こうした観客のノリの良さは、むしろ米国に近いと思った。

帰宅後シータ達と映画の話で盛り上がり、次の週末は2人に休みを取らせて映画に行かせることに。お人好しな主人だ。

ところで映画の内容であるが、言葉はあまり理解できなかった。ただ、唯一の救いは、文字が少し理解できるので、チケット売場とか入場後にあたふたすることがなかったことだった。ネパール生活1年半の新境地だ。

編集を終えて・・・

★妻が一時帰国し、5ヶ月の単身赴任生活が始まりました。間もなく父となることを自覚し、少しでもよりよい人間になっておきたいと思い、毎日1つは新しいことを見つけようと心がけて毎日を過ごしています。映画はその成果?これまで1年半の生活で得た知識からさらに飛躍し、ネパールでの生活をもっと広く深く皆様にご紹介できたらと思っています。(浩司)